忘れられた血統

紅楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
忘れられた血統

【Ｎコード】
Ｎ０２０４Ｚ

【作者名】
紅楓

【あらすじ】
騎士の国ゼルク。その国の辺境にある村で生活する、十七歳の少年シェルス。
村長の統治で、その村は領地の中でも閉鎖的だった。森の外にさえ、許可が無ければ出られないほど。
ある日、シェルスは幼馴染のエレンと一緒に、こっそりと森の中へ向かった。日が暮れて帰る途中、彼らは不思議な少女と出会う。

かごの中の三人と、一人の子供

「おぉい、ちょっと来てくれ！」
日が陰った森の中、男は小声で鋭く言った。
「なんだ？　キノコに毒があるかどうかが分からないのか？」
「違うって！　ほら、そこをよく見てくれ」
少し先にある樹の陰を指差す。
「ん……？　何もない……って、あ？」
「あれって……子供だよな？」
樹の根元で、何かが動いている。
「あぁ……？　人間……か？」
「あたりまえだろ。あれがうさぎに見えるか……えっ？」
「おい、近くに他の人間はいるか？」
「いや、見てない」
「かごを背負ってるぞ？　どこかから来たんじゃないか」
二人の視線の先には、その体には不釣合いな大きなかごを背負った子供が、今にも倒れそうな足取りで、
しかし確かな一歩を踏み出している。
「……ふらついてるな。あれで帰れるのか」
「まぁ、俺達とは関係ないだろ。食料を集めるぞ」
「分かった……って、おい」
バサッ。
「ちっ、まだ何かあるのか？」
「あの子供、倒れたぞ……起きてこない」
「……近づいてみようか。起きてたら、まあ気にしなければいいだろう」
ガサッガサッ。二人の男は、膝まである草を踏み倒しながら人影のあった場所へ歩いていく。

「おい、大丈夫か？」
「……」
子供は、何も答えなかった。苦しんでいる様子もなく、眠るように倒れている。
「ったく、まだこんなに小さな子供じゃねぇか。」
「ふうむ。このかごの大きさ、こいつに合ってねぇぞ？かごの底が土で汚れてる」
「何が入って……おぉっ！？」
「これは……まだ赤ん坊だな。しかし、こんな小さな子供が三人の赤ん坊を運んできたなんてな」
「とりあえず、村に連れて帰ろうか」
「間違っても村長に食料だなんて言うなよ？」
「まさか。俺だってそこまでバカじゃねぇよ」
二人の男はそれぞれ、子供と、赤ん坊の入っているかごを抱えて歩いていった。

1　日常と不満

「頼むから、注文された剣を持っていくのはやめてくれ」
うわっ！　不意に、肩をつかまれた。ふう、心臓がなくなったかと思った。
「びっくりしたじゃないか！」
「品物の剣が無くなって、びっくりしたのはオレの方だ」
ため息をしながら、呆れがちに言われる。
「ランス……なんでオレには剣を作ってくれないんだ？」
オレは、出来るだけ疑問のこもった目でランスを見つめる。
「あのな、ウチは鍛冶屋なんだから、お前も鍛冶を覚えればいいだろ？」
「けっ！　ランスが教えてくれないからだろ！」
「おいおい、オレは注文があるし忙しいんだ。覚えたいなら、自分で観察してろよ」
オレは肩をすくめる。
「オレはどうして作ってくれないのか、って聞いたんだけどな」
「だからオレは、自分で作れって答えてやっただろ」
「まぁいいか。剣を作りたいんじゃなくて、剣が欲しいんだから」
「そうそう。それで、これはお前のものじゃない」
そう言って、オレの手から剣を奪い取った。ちぇっ。
「シェルス。村を勝手に出たら、村長にひどい目にあわされるんだろ？」
「やめてくれ、あんな奴の事は考えたくもない！」
「じゃあ、村を出て行きたい理由は何だ？」
「……」
「やっぱり、あいつが原因じゃないか」
今オレと話をしているのは、ランス。姓名は無い。拾われたんだ。
オレも、ランスも。名前だけは、一緒に拾った手紙に書いてあった

らしい。
「とにかく。鍛冶を覚えたいなら観察して……いや、待て」
なんだ？　ランスは一瞬考え込んだかと思うと、急に明るい声で、
「村長に教えてもらいな」
と、冗談にもならない事を言った。
「ちょ、ちょっと待て！　オレの耳が、おかしくなければ、ランスは今、あの野郎に、頼めって言ったのか？」
オレは一言一言、確認するように言った。
「あぁ、すまん。前の村長だ」
前の……？　あぁ。オレは納得して、うなずいた。
「分かった。頼んでみるよ」
「気を付けて行けよな」
全然心配する様子も無い口調に苦笑しつつ、オレは裏口の戸を開けた。

「えっ……」
「その目つきはなんじゃ。言うのは二度目だが、だめだ」
「そ、村長。だめってどういう……」
「三度目まで言わせる気か？」
「違うって！　だめな理由を教えてくれよ」
オレは今、村長の家にいる。村長といっても今の村長ではなく、一つ前の村長だ。彼を村長と呼ぶべきではないが、オレの心の中では彼が村長だ。だから、オレは彼を村長と呼んでいる。
「ふむ。じゃあ、お前が剣を必要とする理由を教えてくれないか？」
オレはしばらく思い悩んだ後、口を開いた。
「この村を出て行くために。とにかく、オレは剣が欲しいんだ」
「村を出て行くだけなら、剣は必要ないと思うが」
「だから言っただろ。護身用だって」
さっきからずっとこの調子だ。オレがいくら頼み込んでも村長は聞き入れてくれない。……仕方ない。ランスに言われたとおり、作

り方を教えてもらうしか無いみたいだ。
「村長！　せめて、剣の作り方だけでも教えてくれよ！」
「そうじゃな、考えてやろう。だから今日はもう帰れ」
「えっ、今すぐには答えてくれないのかよ？」
「なんにでも、考える時間というものは必要じゃないか。その時間に差はあれど」
　くぅーっ！　仕方ない。これ以上は疲れるだけだからな。
「分かったよ。いつ教えてくれるんだ？」
「わしはまだ教えるなど一言も言ってないんじゃが」
「……じゃあ、いつその答えを聞かせてくれるんだ？」
「分からん。わしの予想では、かなりの日数がかかると予測するが」
「もういい。やっぱりあきらめてランスのを見て覚えるよ」
「最初からそういえばよいものを、まったくお前は……いや、よそう。シェルス、はやく帰れ」
「じゃ、村長。また今度」
「その『今度』は、もう少しましな用件で来て欲しいがな」
　返事をかえす気力もなくなった。オレはきしむドアを開けて外に出ると、慎重にドアを閉めた。だって、強く閉めてドアが壊れたら、ボロボロなドアがこっちに倒れてくるかもしれないだろ？ははは。

「シェールスッ！」
　わあっ！　びっくりした。広場のわきにある樹のそばを通り過ぎた時、その陰からルシィが飛び出してきた。
「何か用か、ルシィ？」
「ええと、ちょっと助けて欲しい事が……」
　ルシィは言葉をにごし、なかなか先を言わない。
「その言葉の先を言えないことを、助けて欲しいのか？」
「ええと・・・怒らない？」
「聞く前に、怒らせないよう努力してくれよ。何の話かも分からないんだから」

「分かったわ。あのね、ペットが逃げちゃったの……」
「悪い、急な用を思い出した。というよりオレはそのために今ここを歩いていたわけで、つまり……」
「もう、やっぱり怒ってるじゃない。そりゃ、何回も頼んで悪かったけど……」
「十三回目だな」
「ううっ、分かってるわよ……」
「本当に。オレははやく家に戻ってやりたいことがあったんだけど……で、今度は何が逃げたんだ？」
「え？あ、逃げちゃったのはオウムの……」
「あきらめるんだな」
言うが早いか、オレは方向を変えて家に歩き出す。
「ちょ、ちょっと！　何で！？」
ルシィは、まさか断られるとは思ってもいなかったとでもいう風についてきた。
「オレに鳥を捕まえろってのか？」
「うん。そういったんだけど……」
「ふうむ……。ルシィ、安心しろ。確か森のはずれに医者がいたはずだから。今すぐ連れてってやるよ」
「わたしを頭のおかしい人と思っているようね……」
「違うのか？　エルフなら鳥を呼べるかもしれないが、オレは人間だぞ。しかも、仮に鳥が寄ってきてくれても、オレじゃ全く同じ鳥は捕まえられないだろ。何でそんなことをオレに頼むんだよ？無茶だ」
「シェルスなら捕まえてくれると思ったから……」
「屋根の上から飛び降りてみようか？　祈りが通じて、羽根が生えるかもしれない。そしたら大空を羽ばたきながらおまえのペットを呼んでやるよ。あちゃ、オレは鳥の言葉を知らないんだった！　ルシィなら知ってるだろ？　ペットと意思の疎通が出来ないわけ無いだろうから……」

「冗談ならやめてよ。本気で言ってるなら、わたしが森のはずれの医者まで連れて行ってあげるわ」
「ううっ、やられた。オレの負けだ」
「もう、わたしは本気で頼んでるのに……」
「もう、オレはあきらめろと言ってるのに……」
真似したのに、ルシィは頬をふくらますだけだった。
「あーぁ、またペット捕まえようっと」
「ルシィに捕まる運命の動物に黙祷」
「シェルス！」
ルシィは散々オレを叩いた後、手を振って家に帰っていった。さあ、オレも早く帰ろうっと。ランスが仕事を終えるまで時間が残ってないからな。急ごう。

「ただい……っ！」
オレはドアノブに手をかけると同時に家の中に飛び込んだ。その結果、ドアに鼻をぶつけるというぶざまな結果になってしまった。いてて。
「うん？　……ドアが可哀想だな。どうしたんだろう」
「オレは透明人間になったおぼえはないんだけど」
「鍛冶を教えてもらえるようになったか？」
ちくしょう！　目と耳で無視されるなんて。
「いや、教えてもらえなかった」
「そうか」
この……この冷たい態度！　ランス、覚えとけよな！　鍛冶を覚えたらまずはおまえから溶鉱炉につっこんで、そして金づちで……。やっぱり、やめとこう。オレはそんな人間じゃないんだ。
「で、仕方なくランスの鍛冶を観察して覚えることになった」
「いや、ちょっとそれは……」
ランスは、ばつが悪そうに、言葉をにごした。
「何だよ！　さっきは自分で観察しろとか言ってたじゃないか」

「あぁ、たしかに言ったよ。でも……今から作る剣は、ダメなんだ」
どういうことだ？オレはランスの顔をのぞいてみる。うーむ、からかっているようにも、だましているようにも、いじわるをしているようでもないな。何と言うか、焦ったような表情だ。そして、少し顔色がくもった気がする。
「今日はもう寝ろ。寝ないというなら寝かしてやるぞ。オレは今、金槌を持っているんだからな。ははは。安心しろ。今度教えてやる」
そういうランスの顔は、いつもの笑顔だった。

う……ん、なんだ。何か聞こえたぞ？　オレは起き上がってあたりを見回した。たいした物もない部屋。隣を見るとベッドがある。あれ、ベッドに人はいないな。一通り見回したあと、自分がどこにいるか見てみる。オレはベッドに座っていた。がんじょうな木の枠に束ねた藁を乗せて、シーツをかぶせた平凡なベッドだ。そしてオレは、その上に毛布を敷いて、毛布をかぶって寝ていた。今は夏だが、そろそろ秋になろうかという季節で、夜は冷え込む。そもそもこの村は大陸の北にあるらしく、冬は寒すぎるくらいだ。
「……さい。……は……」
ベッドにもぐりこんで、毛布を口元まで引き上げた。び、びっくりした……。ようやく落ち着いて、顔を少し出してみると、居間の明かりがついている事が分かった。だれかいるのか？　さいわい、オレが寝ているベッドは居間からは見えない。冷静になったオレは、だれが話をしているのかを知ろうとして息を潜めた。
「とぼけるな！　何度も同じ事を言わせるんじゃない！　おまえが村の外に勝手に出た事は分かっておるんだからな！」
うわっ！　こ、これはびっくりしたなんてもんじゃないぞ？　この声は村長じゃないか！　どうしてあの野郎がうちにいるんだ？　待てよ。まさか、今あいつと話をしているのは……。
「あなたこそ何度も同じ事を言わせてるじゃありませんか。私は村の外には出ていません」

やっぱり……。声の主はランスだった。改めて隣のベッドを見てみたが、オレの予想が外れているとは思えない。
「それじゃあ、おまえの鍛冶場においてあった、あの武器はどこへやった！」
「やれやれ、話の分からない人ですね。そろそろ耳が遠くなり始めましたか。あの武器は処分したと言ったじゃありませんか」
「前から、わしに売れと言っていただろう！　なぜ処分する？　どこへやった！」
「なぜかですって？　他の物に作り変えるためですよ。どこへ、という質問にはこう答えましょう。溶鉱炉です」
「違う！　なぜわしに売らなかった！　それに、あれだけの武器を他のものに作り変える？　ありえない話だ！」
「確かに、あの武器をあなたは売ってくれと言っていました。しかし、売った覚えはありません。あなたがどう主張しようと、あれは私の物です。自分のものをどうするかは勝手でしょう」
「なんだと！？　貴様、わしに逆らう気か！」
「あなたに逆らったつもりはありませんし、逆らう気もありません。私は、自分に従っただけです」
「調子にのるなよ、小僧！」
「あなたこそ、そろそろ静かにしてください。そんなに怒鳴っていたら、シェルスが起きてしまいます。もしかしたら、村中から苦情が来るかも知れません」
「そんなことがどうした！　今すぐにでも貴様に罰を与える事も出来るんだぞ！　正直に言え！」
　正反対だな、まったく。起きてしまうって？　はは、もうオレはとっくに目が覚めてるぜ。しかし、なんであいつがいるんだろう。まぁ、オレとしてはあのまま発作をおこしてぽっくりいってくれたらいいのになと思うけど。
　うーむ。会話の続きも気になるし、これじゃ眠れないな。それに、話の結果次第では、ランスが処刑されるかもしれないな。あの村長

じゃやりかねない。
「そろそろ寝てもいいですか。私は疲れました」
ありゃ？　なんだかぼんやりとしてきたぞ？　オレはいつの間にか体を横たえ、重い瞼を閉じかけていた。
「まだわしは答えを受け取っていないぞ！」
「帰ってください。客人は家の主人に従うべきでしょう」
「貴様……！」
おかしい。こんな急に眠くなるなんて。おい、ランス。おまえ、死ぬ……気か……？　あぁ、眠く……。

2　村の外へ

「シェリー、しっかりしてってば！」
「ううっ！　叩くな。頭がガンガンする！」
「この寝ぼすけ！　歩きながら寝ないでよ！」
「やめろ、エレン……。ぐああっ！くそっ。叩くなって！　お、起きてるから！」
「おはよう、シェリー」
「おやすみ……エレン」
「起きなさいっ！！」
「や、やめっ……、そんなにゆすったら、永遠に眠っちまうぞ！」
「寝てる人間が、どうやって眠るのよ！　ちゃんとして！　村長に見つかったらどうするの？」
「うん、そうだな。あいつに見つかったら大変だ。エレン、静かにしろよ。見つかったらどうするんだ？」
「シェリーのせいにするわ」
「……」
　この状況を説明しようか。オレは朝（昼に近い）、エレンに叩き起こされた。エレンは、ルシィと双子の姉妹で、オレ達と同じ孤児だ。しかし、性格はルシィと似ているようで違う。ルシィと比べて大人びてはいるが、その分容赦しない所もある。
　そして、オレはガンガンする頭と、焼けるように痛い目と、重たい体を引きずって外に出た。もしくは、エレンがあらゆる苦痛にうめくオレを引きずって外に出た……というのが正しいだろう。
　つまりオレは、寝起きの頭に降り注ぐような大声を聞きつつ、寒空の下をバシバシ叩かれながら引きずられまいと必死の思いで歩いている。……これでも、この状況の説明は要約している方だ。
「ああっ！　野いちごを摘みに行くだけで、なんでこんな目にあわなきゃいけないんだ？」

「手伝ってくれると言ったでしょう。それに、見つかってもシェリーのせいに出来るわ」
「答えになってないじゃないか！」
ちっくしょう！　自分が大声を出したわけだが、うああ！　頭の中で鐘が鳴ってるみたいだ！
「お？あの二人は……」
「やめろ、やめろ。村長に報告しようなんて考えるな。あんなやつにかかわったら、ロクなことにならねぇぞ。」
「あ、そうだな。はやくいこう」
しまった！　他の人に見つかった。ううむ、まずいな。
「エレン。今オレ達が村の外に出ようとしてるところを見られたぞ」
「平気よ。村長にはいわないって言ってたし」
「……それだけ堂々としてるなら、オレを連れてかなくてもよかっただろ？」
「あら、シェリーがいたほうがたくさん野イチゴを持って帰れるわ」
「オレは荷物持ちか？」
「ええ」
ううっ。オレにはいいことが一つもないのか？　ちぇっ、本当になんだってこんな目にあってるんだ。

「シェリー！　はい、このかご」
「……ほら」
オレは野いちごがいっぱいにつまったかごと、からっぽのかごを交換した。くそっ、荷物持ちだけでなく、イチゴ摘みまでやらされるとは。
「もういいだろ？　十分に取れたし、帰ろうぜ」
「うーん。じゃあ、そのかごをいっぱいにしてちょうだい」
よし！　終わりが見えればやる気も出てくる。オレは葉をゆらす風と競争するかのように素早くかごをいっぱいにした。
「ありがとう！　やっぱり、シェリーはやさしいわね」

この言葉は、少しおかしいな。エレンの人使いが荒い、というべきか。だが、エレンの笑みを見ていると、まあいいかな、と思えてしまう。

「早く帰ろう、疲れた」

オレは思いっきり伸びをする。うーんっ！　あぁ、清々しい解放感だ。

「じゃあ、これ持ってくれる？」

うわっ、忘れてた。オレはぶつぶついいながらかごを持つ。あれっ、なんで半分なんだ？　エレンは、オレの気持ちを察したかのように言った。

「疲れたでしょう？　私が半分持ってあげるわ」

「ふうっ、そうか」

オレ達は並んで森の中を歩く。そうだ、村に帰る時はどうしようか。

「エレン。だれにも見つからないで帰れるかな？」

「シェリーの家の裏から入りましょう。あそこがいちばん見つかりにくいはずよ」

そうだな。オレの家は、森のすぐ近くにある。しかも、そこまで来る人はほとんどいない。ふむ、オレの家から出てきてもだれも不審に思わないだろう。エレンにしては、なかなかうまく考えてたようだな。

ここまでくれば、オレの家はもうすぐだ。子供の頃から、このあたりで遊んでいたからな。村長があいつにかわるまで。

グルルルル……。

「あら、何の音かしら？」

ガルルルル……グルル……。

「風が枝をゆらした訳じゃなさそうだ。エレン、急げっ」

「えっ？　ちょっと、なんなの？」

「オオカミだ！　くそっ、なんでこんなところに！」

「シェリー！　前にっ、前にもっ！！」

グルルウ……。しまった！　どうやらのんびり歩いていたせいか、オオカミに包囲されていたようだ。
「ちっくしょう、どうしようもないが、やつらの晩餐になるよりはましだろう。エレン、隙が出来たらすぐに村へ走れ！」
「隙って……そんなの、出来るの？」
オレは、ちょうど足元にあった棒切れと石ころを拾った。……ちっ、情けないけど、手が目に見えるほど震えている。
「……やってみるさ！」

「グルルルル……」
「ウルルルル……」
オオカミ達は、徐々に迫ってくる。血に濡れた牙、殺気を帯びた目。気が狂いそうだ。腕がガタガタ震える。
「シェリー、大丈夫なの？　このままじゃ、やられちゃうんじゃない？」
エレンの言う通りだ。しかし、オレが何か出来るかというと、何もない。思いついたとしても、持っている石ころをぶつけるくらい……。
「くそったれ！　どうせこんなことしか出来ないだろ！」
「ギャンッ！」
オレの投げた石ころは、うまくオオカミの足に当たった。
さあ、怒っただろ？　驚いたんだろ？お前達は、一斉にオレ達を襲って…オレ達はお前達の餌に、なる。ううう。ちっくしょう。
しかし、オオカミ達は襲っては来なかった。そして、代わりに遠吠えを始めた。
「ウオオォォ……ン」
「オオオオォォォーン……」
しばらくして、大きなオオカミが現れた。奴がボスなんだろう。
オオカミは、こちらの様子を見るかのように距離を取っている。
そのボス（と、思われる）オオカミの目は怪しく光っている。…

…あんな目をしたオオカミなんて、聞いたことが無いぞ！
背筋がぞっとし、冷や汗が止まらない。オレは、このオオカミに太刀打ち出来ないと断言できる気がする。……いや、ほかのオオカミに対しても、勝てる気がしないが。
オオカミの瞳が、ひときわ強く輝いた。オレが身構えた瞬間、持っていた棒きれが粉々にはじけた。
「シェリー！」
エレンが叫んだ。オレは、大丈夫だと答えようと振り返った。ただ、そんな余裕を持ちあわせてはいなかったが。
そして、オレの目の前を何かが、きらり、と横切った。
「ギャイン！」
ボスオオカミの悲鳴が合図になったかのように、周りのオオカミは一斉に逃げ出した。一体、何だったんだ？　飛んできたものは、ナイフのような物だった気がする。
オレはとうとう尻もちをついてしまった。
シュシュシュッ！
すると今度は、オレの頭上を、その光るものが飛び抜けていった。空気を裂きながら飛んでいったそれは、オオカミを切り裂き、つらぬき、突き刺さった。
あまりの光景に、一瞬目をつぶり、そして開けた。じっと見てみると、それはガラスのようだった。いや……氷、か？
振り返ってみると、エレンはオレと同じように座りこみ、後ろを見ていた。
誘われるように、その方向をみてみると、そこには見たこともない少女がいた。

「……」
沈黙。目が合った。オレは未だに状況が飲み込めず、もう一度オオカミを見た。
オオカミは相変わらず無様な姿で倒れている。怪しく輝いていた

瞳は光を失っていた。
そして、突き刺さっている氷の刃。
「あ……これ、君がやったのか？」
どうにか見つけた話題は、こくり、と少女が頷いてまた途切れてしまった。
「あの、助けてくれてありがとう」
エレンがそう口にし、オレはしまった、と思った。彼女がオレ達も襲ってきたらどうする？　たった今、目の前で刻まれるオオカミを見たせいか、足に力が入らなかった。
しかし、少女はまたしても、こくり、と頷くだけだった。
ふいに少女が、腕を上げた。その腕はオレ達の方向に向けられている。周りに霧が発生し、その中から氷の欠片が幾つも出来た。
氷の刃は、ものすごいスピードで迫ってくる。
「うわあっ！」
オレは、思わず伏せた。しかし、氷の刃は、オレとエレンの間を通り抜けていっただけだった。
「ギャウッ！」
何、まだいたのか!?　しかし、悲鳴を上げたのは新たなオオカミではなく、あの、目が光っているオオカミだった。

オオカミは頭を振った。その瞳は、強く輝き続けている。
「グルルルル……。グワアアッ！」
うわ、飛んだっ！　オオカミは跳躍し、オレ達に向かって襲いかかろうとしている。ちくしょう、オレ達、死ぬのか？
そんなことを考えていると、再び氷の刃が背後から飛び出した。
シャシャシャシャッ！
「ギャウウッ！」
オオカミは怯んだが、氷の刃は容赦なくオオカミに襲い掛かった。
オレは少女の方を振り返った。少女は腕をオオカミに向け、ただじっとしているだけだ。しかし、少女の周りには、無数の氷の刃が

現れては飛んでいく。幻想的な光景だ。さっきは、急なことで分からなかったが、よくみると氷の刃が現れる時、空気が凍っているように見える。かなりの数があるから、少女の周りは霧に包まれ、それを夕日の光が反射して美しい。

オレはこの状況を忘れ、ただぼーっと少女の姿を見つめた。

「グギャアアッ」

びくっとして視線を戻す。オオカミは恐ろしい鳴き声をあげている。氷の刃は、やむことのない雨のように降り注いでいる。

ふと、服の裾を引っ張る感触を感じた。

「シェリー……」

エレンだ。どうやら、不安になって落ち着かないらしい。オレは頭をなでてなだめてやる。

「心配するなよ、大丈夫だって……多分」

オレ自身、どうなるか分からず、言葉の最後は自信がなくなってしまった。

気がつくと、オオカミはうなりながら毛を逆立てている。少女の方も、腕を下ろし普通に立っている。そのときだ。

「離れて」

誰だ？　振り返ると、少女がこちらを見ていた。初めて声を聞いたな。しかし、そんなことは気にならず、オレ達はただ言われたとおりにした。

オオカミと少女が対峙しているのが、いっぺんに見える。当事者から傍観者になったオレ達は、ぽかんとして目の前の戦いを見つめた。

「……」

少女が何かをつぶやきはじめた。何だろう？　しかし、声は全く聞こえてこない。口は動いてるはずなのに……。そんなことを考えていると、少女が小さく叫んだ。

「ファイヤーボール！」

ゴオオッ！突然現れた火球は、草を焼きながらオオカミに向かっ

て飛んでいく。
魔法か!?　オレは呆然とし、その信じられない光景を見つめた。
「ウウウー……」
オオカミの目が光った。すると、火球は消えてしまった。今度は何だ?　もう、何が起きても驚くしかないから、何でもこいという覚悟だ。
「グアアッ!」
う、嘘だろ……。オオカミの目がまた光ったかと思うと、今度はオオカミを中心にして炎が広がり始めた。つまり、森を焼く炎が、その勢いでオレ達に迫ってくるということだ。
「うわあああっ!」
オレ達は、あわてて逃げ出そうとした。ふと、少女を見た。逃げるなら彼女も連れて行かなければ!
少女は、少しあわてた表情だった。しかし、またしばらく口を動かすと、すぐに叫んだ。
「ウォール・オブ・アイス!」
ザザザーッシャシャシャッ!
あまりに状況が急転しすぎて、混乱してきた。目の前に、巨大な氷の壁が現れ、オオカミもろとも炎を飲み込んでしまった。炎は消え、オオカミがどうなったかは分からない。
結局、オレとエレンは、呆然と立ち尽くすほかなかった。

ガシャシャアアン……。
少し経つと氷の壁は崩れ、氷づけにされたオオカミは、今度こそ動かなくなっていた。
「……大丈夫だった?」
氷の破片と砂が舞う中、少女がこちらに歩いてきた。
「大丈夫……だけど、今のは一体なんだったんだ?」
どうにか声を出したオレは、未だ残っている氷をちらり、と見やった。少女は、今度は頷かず、ちゃんと答えてくれた。

「気付いてると思うけど、魔法よ」
「本当に、魔法なのか？」
信じられない！　まさかオレが、この目で本物の魔法を目にするとは！
「ええ。ところで、あのオオカミは何故こんな所に？」
そうして少女は、オオカミを指さした。瞳の光は完全になくなり、ぼろぼろになった亡骸があるだけだ。
「どうしてって……。オレ達もわからないよ。気がついたら、突然オオカミに囲まれていたんだ」
「周りに、他の人間はいないようだけど……」
「あ、それは、この近くに村があるんだけど、村人はみんなそこから出るなって言われてるからだ」
「そう……。ところで、あなたもその村人のようだけど。どうしてここにいるの？」
「それはもちろん、こっそりと……」
エレンにわき腹を小突かれて思いとどまった。いてて……。そんなに強く小突く事はないんじゃないか？
「ちょっといいかしら？　わたしはエレン。あなたの名前は？」
「え？　ああ。……フィリスよ」
「そう。この人の名前はシェリーよ」
「シェルスだ」
フィリスはくすっと笑った。なんだかバカにされた気が、しないでもない。
「ねえ。これから村に戻るんでしょう？　……わたしも、連れて行ってくれない？」
ふむ、どうしようか。エレンの方を見ると、嫌がる様子はまったく見えなかった。オレも、命の恩人だし構わないと思うが、問題は村に入ってからのことだ。
エレンが、オレの考えを察したように、言った。
「わたし達が無事にもどれるなら、彼女だって一緒に入れるはずよ。

それに、そのあとどうするかは……ランスに頼んでみたら？」
「なるほど。とりあえず、急いでもどらないと面倒な事になるってことか」
そうと決まれば急ごう。エレンは、フィリスの手をとって進もうとした。フィリスも、引っ張られて倒れそうになりながら進んだ。
しかし、フィリスは立ち止まり、恥ずかしそうに呟いた。
「あの、村に行く前に、その野いちご……少し、ちょうだい」
オレ達は笑いながら、かごにいっぱい入った野いちごを命の恩人に差し出した。フィリスは少しつまんで口に入れると、恥ずかしげに頬を染め、オレ達に「ありがとう」と小さく言った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0204z/

忘れられた血統

2011年11月30日23時50分発行